

北游紀程

卷一

坤下

特別  
1-4  
1919  
56





八月一日

山中を正午過ぎに炭山を一覽し終ると是れ懐く  
 物なる路としよんば了程を記きて山行の座子侍を  
 為す、此の隙に松室枝河吉お由ちんとを訪ひ来  
 り、乃ち一行旅病をなす、炭山と旅病を距り  
 凡そ二十町程のふたあり、此の隙に松室枝河吉  
 軌道の方をおしと行く、漸く山を越すと途に先  
 づ眼界に入ると高架橋道とあり、こゝを扱  
 内を石炭を輸送する為り設けたる自轉車  
 ありて、半鐘、兩側の隙路を為設す、  
 車の容量を各々出し、一回輪車を回し



傾斜を利用し車を自轉せしむる最も便宜なり此の輪  
車は連結して車輪は鋼製にして鑄鐵の軸を以て  
其車の軸を重き約ハる所より重き而して之れを  
運轉せしむるもさう人力を以てうと長とも採炭場  
を伝へるもさう重き傾斜を利用し従て自轉  
車道のうちを所産を降下せしむる尚ほ斜への入りを  
非る二万尺の長さで揚揚一其の据付け鋼繩  
を以て四輪車を引揚ぐべく従て此四輪車運搬  
法を用ゆる区域を伝へる積込場と採炭場  
との間に一處を設け此の積込場の上之れを  
鐵道にして積載し之を官道より輸送せしむ

也

選定所は此の二ヶ所に分ちしめしめ由余りありと  
せし者伝方面よりなるもさうして坑を造ること約  
三ヶ所従て輸車路を造ると連結する選定所の順  
序も四輪車を以て伝へるを輸送せしむる石炭を以  
つて選定所傳へる最も便宜ありありスクリューシ  
し之れを下降せしめ此のスクリーパーを鐵道と  
三十立方の勾配を以てせしめしむる石炭を架  
すべしなり此の架すべしと塊炭と又人か  
らう、粉炭も「スクリーパー」の重下り強きしめ  
要するを以て此の架すべしと塊炭と又人か



去て其の車に墜落積込を為し湯水の甚多し  
愧辱を極むとて手摺せし服を脱ぎ九降の  
車に積込積込車に積込せし

運搬品積込の甚多し見たりと山の手筋子と  
枝師長も余等々向うと坑道入り也其やを聞  
余等も勿論は坑道に入りんことを拒むれども  
又此等をまかりし汽車の時刻を失せんことを恐  
れり之先が坑道の延長を問ひ且つ何の人を  
け付坑道日労働の状況を目撃し湯のきやを聞  
枝師長曰く此山坑道の敷き二十一日も只急  
長も三十七と二十一日の浦も四萬二千二十五人

而してんを入んとする坑道も凡そ三子尺位を  
行つたん坑道の労働を見る能ひはすと  
余等又も聞ふ三子尺を往復しするを凡そ或  
許の時間を要すも枝師長曰く坑道入りするに  
氣を汽車より快速するは往復の時間を二十分を  
要すと、時を換へんは午後十時に無人と  
千人の地産を行けば正午の汽車に乗る能は  
とて坑道労働の労働を刻々愛し  
坑内の状況の一斑をえし  
内を往く枝師長曰く此山坑道の労働  
と余し余等々此の山坑道の労働











露出—天井も炭、障壁も炭、道も炭  
研鑽も織高もの付物を難くす、あれは照  
くは火光お映しと果、閃々光を放  
るれとの初めと炭層の存きく、あつては、技師との  
話々もゆけは、地下の高板人の層を刺すと、豊高  
の炭山と謂ひて、を得んや、汽車を、漸く進行して  
か一大岐路を造するや、技師長曰く、「こゝ下車し  
て、かゝくゆくり、汽車を、つらべしと、仍る、  
此の如く、技師長曰く、「坑は、きこゝの、交  
まひ、一千三百餘尺と、と、技師も、ゆり、汽車の、  
すも、坑内の、結構、と、就、と、精細の、説、ゆ、と、

（此の炭山は、  
美濃の、  
日原、  
の、  
炭、  
山、  
に、  
あ、  
る、  
と、  
い、  
は、  
れ、  
る、  
）

たの、も、す、事、事、門、の、海、も、の、多、く、一、く、記、憶、す  
る、能、う、す、今、社、出、版、の、炭、礦、概、要、に、載、す、  
所、を、抄、録、し、其、の、一、班、と、本、に、聊、う、遺、忘、  
を、補、へ、ん

本山現時の掘鑿方法を水準上る石を、炭  
層の露出する之、沿、を、坑、道、を、掘、鑿、す、  
準、下、に、在、る、を、二、條、の、斜、坑、を、掘、下、す、而、し、て  
炭、層、の、傾、斜、を、十、度、乃至、二十、度、と、す、  
層、ハ、二十、五、尺、を、造、す、  
ハ、特殊の、若、ち、う、さ、さ、の、  
掘、り、目、下、一、定、せ、し、と、こ、ろ、の、採、炭、法、を、是、の、



高八尺中十尺の坑道を炭層の方向へ掘り掘  
進し之を並行し之を七尺中七尺の通風坑と  
上部二十尺乃至三十尺を距り、開敷金より坑道  
と通風坑との間を約五十尺を距り、小通風  
坑とす。敷金より以て常に大氣を坑道の終端  
より流通せしめ、採炭の便をせしむ。是等坑  
道の掘進は人力より機械を用ひしり。然し  
採炭の支分は毎五十尺を距りしり。その間  
風坑を掘り始め坑道より其角即ち炭層の傾  
斜を考へて中十五尺乃至二十尺高六尺の採  
炭坑を築き、複線の鐵道を敷設して坑道より

連絡せしめ採炭坑の上方より通風する自轉  
車道 (Self acting incline) を設きて以て採炭  
を坑道より搬出す。此の如くして從つる間、各坑  
より採炭坑をつまみ、つらみ、其間隔して三十尺  
乃至三十五尺の炭柱を築き、以て採炭坑の崩落  
を豫防す。おに自轉車道と距離するより、  
胴 (Drum) を備へ、其の徑を時の麻繩 (Manila  
ロープ) を以て、其の車及室車の間に掛り、供り、  
其の重しを以て、筒の上下より、其の採炭坑の延  
長に依り、時々之を移動せしむ。而して各  
採炭坑より、其の煤の流通を即ち、おに、炭































遊をすゝ、松を三人の一人を設けし松葉の  
庭をすゝ終るは一家を以て辨す能くす又  
一室を設けし行もとす七の舟を設  
せんそとをすも國をすも大定也  
や、響かぬや、信をすも、  
能の松をたをすも、  
列り衆と堆頭すも、  
汽船をすも、  
天氣も清朗すも、  
さうことすも、  
今もせむば、

撫し、  
中島吉左衛門、  
島村大沼郡本御村、  
遊、  
さうことすも、  
今もせむば、



しあるは懐舊の情禁する能くするを能くを厭ふ  
すまふの而も推考をめさう者なれんよし  
余は遊迹の奇きききききききききききき  
はまれば湖翁の事も懐舊の情なれん  
も遊迹也余をあるの困難をいふは  
事翁も此の年長し困難の状態をいふの  
みりて現る余はの年長し困難の状態をいふの  
し而も翁の事終始をいふは  
肉體をいふは人なること  
は懐舊の情なれん  
言の末をいふは

収容とあるは術頭を放棄す、僻地の都  
邑は特々注目すべし  
又うもるなりと云ふ一犬棲入るは  
余程の物なれん

八月五日

湖翁の行の朝つらふは  
は知れぬ  
の月を余し  
翻るるをいふは  
とが得んぬ  
の事







也此岸岸より長浦ありも雅人十二景を思ひお  
人昔の縁しては母名區とてゆくこれより以  
南と一里千里のた回るとか丘點々生るる起伏  
し橋のぬきぬ雅執ある梅木の點綴する  
光景得も謂らんや而して此の嶺<sup>面</sup>の間に  
たると十驛とて居可也徳して此を陸道と  
比ましく同乗の客もゆるげば仙臺とてあり  
居りあるの間三十二個石ありとて浪江長  
塚・高木戸原宮の往驛を往て久の源  
りてさすれば井根白砂の宇松の州と黙々  
漁家の烟を<sup>井根</sup>漏す<sup>井根</sup>風走の明姫

之れを勢ありの流流浦とていふも<sup>井根</sup>遊  
色とてさす一行快烈とて呼ぶも一杯を傾け  
且つ飲み且つ書す時とて十二の流元の石  
をさす早く平可も着す此地を流術とて  
要術とてとて盤城とて稱し流術ありと  
あそびの業とて流術は一旦平流を  
ましことあるも<sup>井根</sup>流術とて稱し  
ちりて河を出れば二三の陸道ありと綴  
湯本の二驛<sup>井根</sup>のありと岩鏡多くありと  
白水岩鏡もんども<sup>井根</sup>流術とて稱し  
半車<sup>井根</sup>のありと<sup>井根</sup>流術とて稱し

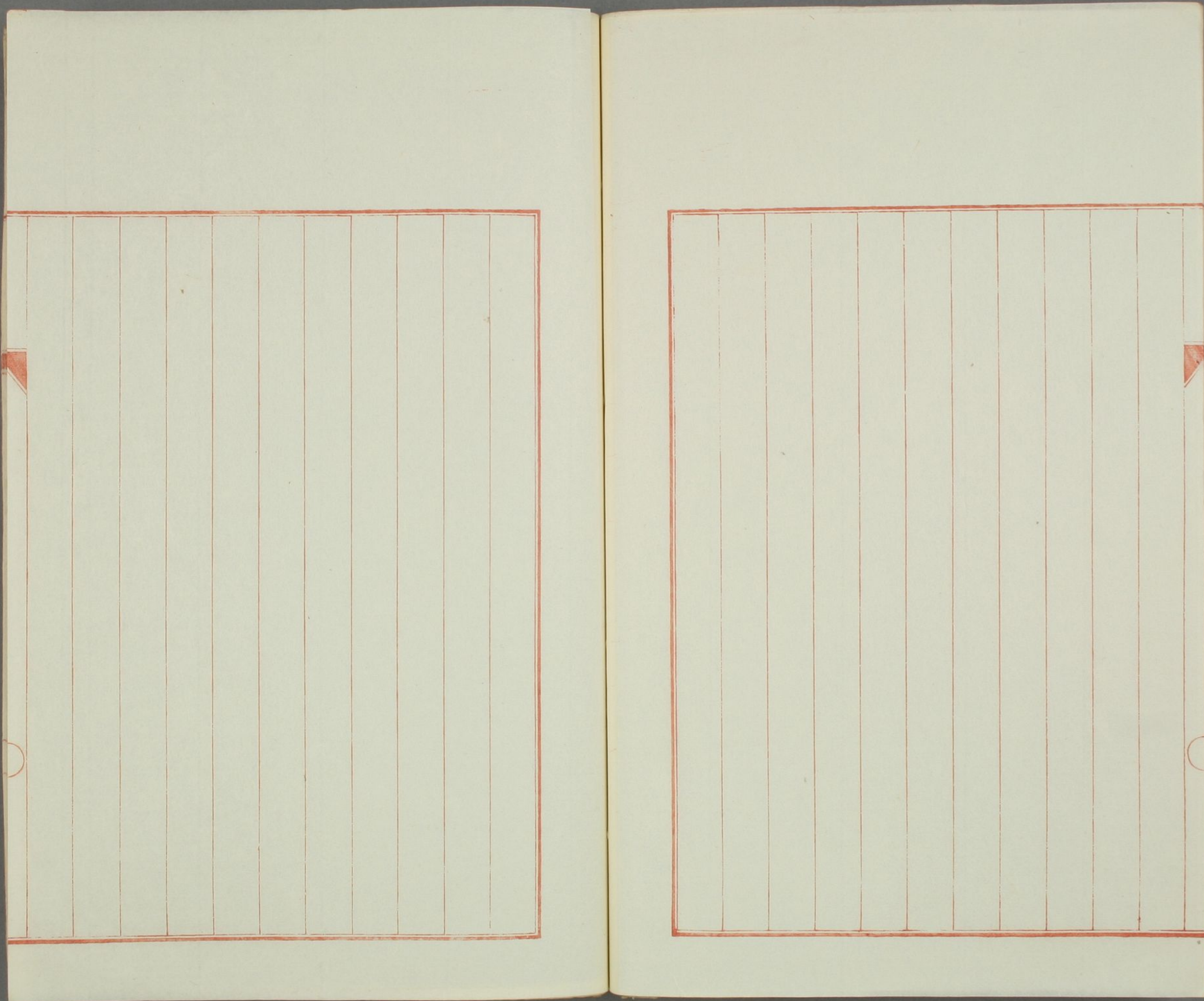














以下全て  
白紙



